

## 第33回

## 第4章 国際社会に生きる日本人としての自覚

## 西洋思想との出会い

## 今回学ぶこと

明治になって、さまざまな西洋思想が押し寄せ、それまでの日本の伝統思想との激しいぶつかり合いが起こった。そうしたなかで、西洋思想に学びながらも、自分たちに会った独自の思想を作り上げようとした思想家たちが現れた。その代表的な例として、福沢諭吉や中江兆民の政治思想、内村鑑三のキリスト教、夏目漱石や森鷗外の文学などを考えながら、明治の先人たちの努力のあとをたどってみる。



講師

田中久文

## ■ 福沢諭吉と自由民権運動 ■

明治の初め、西洋の政治思想を紹介し、それまでの封建的な制度を批判した思想家の代表者が福沢諭吉である。福沢は、『学問のすすめ』で、誰もが生まれながらにして平等な権利を与えられているという考え方を説いた。そして、実際に役に立つ「実学」を学び、それぞれが「独立心」をもつべきだとしたが、そうした「独立心」は、武士のもっていた「瘦せ我慢」の精神にも通じるものだとしている。そして、「独立心」をもった人々が、自分の国のことを自分のこととして引き受けることによって、その国の独立も達成されると考え、「一身独立して一国独立す」ということを説いた。

また、福沢は日本の独立を維持するためには、他のアジアの国々との関係を断って、欧米の先進国との仲間入りをしなければならないという「脱亜論」を主張した。

一方、自由民権運動の中心的思想家である中江兆民は、洋学紳士君、東洋豪傑君、南海先生の三人が日本の将来について議論する『三酔人経綸問答』を書いた。そのなかで、自分たちで勝ち取る「回(恢)復的民権」と、権力者から与えられる「恩賜的民権」の違いについて論じている。

## ■ キリスト教と社会思想 ■

明治の代表的なキリスト教徒に内村鑑三がいる。内村は「武士道に接木されたキリスト教」というものをめざした。彼は『教育勅語』の発布の際には、いわゆる「不敬事件」を起こしたりもしたが、一方で強い愛国心をもち、自分が敬愛するものは「二つの

J (Jesus と Japan)」（イエス・キリストと日本）であると述べている。また、西洋の教会からの独立を主張し「無教会主義」を説いた。また、日露戦争のときには、反戦の立場を取った。

### ■ ■ 森鷗外と夏目漱石にみる近代 ■ ■

明治になると、文学の世界では、西洋的な自立した個人を描こうとする試みが起こった。しかし、それは日本においては多くの困難を伴うものであった。

森鷗外は、自己を確立させることの難しさを小説によって表した。『舞姫』では、立身出世のために恋人を捨てる留学生の姿を描いた。また自己を支える理想的なものが得られないことにも悩むようになり、神がいるかのようにふるまう「かのように」の哲学や、「諦念」(諦め)の思想を説いた。また、医者でもあった鷗外は『高瀬舟』で安楽死の問題を扱っている。

夏目漱石は、講演『現代日本の開化』で文明開化が上滑りなものであることを批判し、講演『私の個人主義』では、個性を尊重する個人主義を説いた。しかし、そうした個人主義というものは、人間の内側にひそむエゴイズムの問題ともつながっていることに気づき、それを『こころ』などの小説の世界で見つめようとした。

#### ◆ コラム ◆

今回取り上げた福沢諭吉、中江兆民、内村鑑三、森鷗外など、明治の思想家の多くは武士の出身でした。ですから、彼らはその立場はそれぞれ異なっていますが、その精神の底には武士道的なものが流れていました。その一人である福沢は、幕府に仕えていた勝海舟や榎本武揚が、明治になると幕府を倒した新政府に仕えてしまったことを、武士の「瘦せ我慢」の精神に欠けているとして厳しく批判しています。西洋を模範とする文明開化を押し進めた福沢が、一方でそうした武士道を説いていたことは興味深いことです。